

教育の専門化が進み、加えて教員・学生間の壁が取り払われ、両者の親密度が増したこともあって、文学、語学、事情（歴史、経済、思想史等）の研究者をめざす学生が増え、その傾向はロシア語学科の伝統として今も受け継がれている。

八〇年代後半になると、ロシアのペレストロイカに呼応するように、ロシア語学科の編成も大幅に変わっていく。志水速雄の後任として事情担当の渡辺雅司（ロシア思想史）が着任、一九八八年には臨時増募によって安岡治子（ロシア文学、九二年東京大学に移籍）、九〇年には前年に学長に就任した原卓也の後任としてロシア文学・芸術論の亀山都夫が加わる。

さらに相次いで停年退官した飯田規和（九一年）、新田實（九三年）の後任として、ロシア史・民族問題が専門の高橋清治とロシア経済史の鈴木義一（ともに東京大学出身）が着任したほか、外国人任用法によって「古今集」の訳者として著名な日本文学研究者のアレクサンドル・ドーリン（九三年―）が採用されることになる。

十一 現状と人材

こうした専任教員の交替によって、ロシア語学科の年齢構成は若返り、原体制以来の学生との交流はさらに密度を増し、一九九五（平成七）年以降の新カリキュラムのもとでも、専攻のロシア関係で卒業論文を執筆する学生の数が非常に多く、どのゼミナールも活気に満ちていることは特筆に値しよう。また新スタッフの加入により、それ以前よりさらに専門化が進んだため、大学院進学率は本学一を誇っている。

一九九一年には、言語学の千野栄一教授の永年の努力が実を結んで、チェコ語とポーランド語が日本で最初の専攻

語として新設され、ロシア語学科はロシア・東欧語学科に改編され、ロシア語専攻の学生数も一〇名増え七〇名となった。

さらに九五年には、外国語学部が従来の語学科体制からより広域的な七課程に改編され、教官は各々の専門にしたがつて講座に所属し、学生は入学時に専攻語を決めておくことは従来どおりで、入学後の変更も認められないが、二年時から教官の所属する講座に設けられている専攻コースに登録、三年時に正式に選択・決定することとなった。一九九九年現在、教官スタッフはつぎのとおりである。

〔言語・情報講座〕教授・磯谷孝、中澤英彦、助教授・石井哲士朗（ポーランド語）、講師・金指久美子（チェコ語）
 〔総合文化講座〕教授・渡辺雅司、亀山郁夫、アレクサンドル・ドーリン、助教授・関口時正（ポーランド文学）、

鈴木義一

〔地域・国際講座〕教授・高橋清治、小原雅俊（ポーランド文化史）、助教授・篠原琢（チェコ現代史）

これら専任スタッフ以外に、三〇名以上の非常勤講師によつてきめ細かい授業がなされ、学生の知的好奇心を触発している。とりわけ専任教員全員によるオムニバス形式の講義が行われる地域基礎Ⅱは、各教官が自分の専門とする分野を、一、二年生向けに平易な言葉で語りかけることによつて、スラヴ語、スラヴ文化の多様性を学生に知ってもらうことを目的に設けられた科目で、好評を博している。

大学院については、一九六六（昭和四十二）年に外国語研究科修士課程が、七七年には地域研究科修士課程が設置されていたが、九二年に至つて念願の大学院地域文化研究科博士課程（前期・後期）が設置されることになる。なおロシア語専攻からは、大須賀史和（平成二年卒）が、「ベルジャーエフの宗教思想―哲学の形成と問題群」で九七年に学術博士の学位を授与されている。

ロシア語学科がこれまでに輩出した人材は実に多方面に及び、とてもここで触れる訳にはいかないが、戦前は外務省、商社、満鉄等に就職する者が圧倒的に多かったが、戦後の特徴としては外交官をめざす者は減り、かわってマスコミと商社に活躍の場を求める者が激増したと言えるだろう。マスコミのモスクワ特派員の大半は本学出身者であり、支局長を務めた者だけでも平野裕（毎日新聞、昭和二十八年卒）、大谷慧（朝日新聞、昭和二十九年卒）、江川昌（毎日新聞、昭和三十八年卒）、小林和男（NHK、昭和三十八年卒）、三瓶良一（毎日新聞、昭和四十五年卒）、布施裕之（読売新聞、昭和五十四年卒）、名越健郎（時事通信、昭和五十一年卒）、吉田成之（共同通信社、昭和五十二年卒）等の名が挙がる。産経新聞の支局長だった斉藤勉（昭和四十七年卒）はソ連共産党の解体をスクープし、ポーン上田賞を受賞している。また特派員時代に身につけた知識を買われて、大学教授に転身した吉成大志（昭和二十八年卒、NHK↓立命館大学）、森本良男（昭和三十年卒、読売新聞↓桃山学院大学）、中澤孝之（昭和三十六年卒、毎日新聞↓県立新潟女子短大）、鈴木康雄（昭和三十九年卒、読売新聞↓自治医科大学）のようなケースも増える傾向にある。

最後に戦後の外語ロシア語学科が生んだロシア研究者の名前を思いつくままに挙げておく。

ロシア語・言語学の分野では、佐藤純一（昭和二十九年卒、東大教授時代、長きにわたって本学で古代ロシア語とロシア語学を講じた。日本ロシア文学会会長。創価大）、千野栄一（和光大学長）、『岩波ロシア語辞典』の共編者である新田實と飯田規和（県立新潟女子短期大学長）、磯谷孝（東京外大）、大津定美（昭和三十九年卒、神戸大）、井上紘一（同年卒、北大スラヴ研究センター長）、桑野隆（昭和四十五年卒、東大）、木村崇（昭和四十六年卒、京大）、森俊一（昭和四十八年卒、上智大、一九九九年没）、原求作（昭和五十八年院修了、上智大）、神山孝夫（昭和五十六年卒、大阪外大）などがある。

またロシア文学・思想関係では、中本信幸（昭和三十年卒、神奈川大）、左近毅（昭和三十七年卒、大阪市大）、工藤正広（昭和四十六年院修了、北大）、渡辺雅司、亀山郁夫、沼野恭子（東京外大）、坂内徳明（昭和四十八年卒、一橋大）、佐々木照央（昭和四十四年卒、埼玉大）、近藤昌夫（昭和五十九年院修了、関西大）、吉川宏人（昭和五十九年卒、福島大）、清水俊行（昭和五十九年卒、神戸市外大）などが、精力的に活躍している。

このほか名前を挙げればきりがないので省略するが、異色の存在としては、イタリア文学の第一人者である千種堅（本名川岸貞一郎、昭和二十六年卒、愛知大）、岩田宏のペンネームで詩、小説を書き、同時にロシア文学、英文学の翻訳家でマヤコフスキー研究の先駆者でもある小笠原豊樹（昭和二十八年中退）、また在学中から脚光を浴び、今や若手小説家のトップランナーともいうべき島田雅彦（昭和五十九年卒）や、同時通訳の名手で、エッセイスト、小説家として活躍中の米原万里（昭和五十年卒）などの名を挙げる事ができる。

付記

この原稿を執筆するにあたって、八杉貞利の業績とグレーボフの「露西亜文典」、さらに露西亜会の役割については、和久利哲一氏の原稿を使わせていただいた。また戦後の部については、原卓也氏が日本ロシア文学会で準備中の「ロシア語教育史」に寄せた原稿を参考にさせていただいた。記して感謝に代えたい。